

海部忠藏追想録

丸井みどり編



晩年の海部忠蔵（80才）  
（背後の額は自筆にて布教に用いた「天ハ人ノ和ヲ喜ブ」の意）

目次

一、普通土女学校の起源と発展について	一
一、祖父「海部忠蔵」について	二十一
一、サンケイ新聞抜萃「東京の高校めぐり」	三十二
一、海部・前田家系	三十三
一、徳島市民双書「阿波の洋学事始」	三十四
一、現代日本文学大系6 北村透谷・山路愛山集 キリスト者としての透谷	三十六
一、海部忠雄氏書簡	三十七

## 普連土女学校の起源と発展に就て

海 部 忠 蔵

私が普連土女学校の校長として、就任しましたのが明治二十年の十二月でありました。これより先き東京市麻布本村町に米国フィラデルフィア外国婦人伝道会より、日本基督教伝道のため派遣せられた基督教「クエーカー」派の宣教師で、ジョセフ・コサンドという人がありました。

此の人は当時芝浦に近藤真琴氏の経営せる攻玉社と称する学校の英語の教師をされていまして、日曜日の午前には本村町の自宅で学生を集めて、英語で聖書の講義をなし盛んに基督教を伝道されていきました。

然るにコサンド氏の住居して居りました本村町の家屋は津田仙氏の所有に係る二階建の西洋館でありまして、コサンド氏が津田氏より借り受けていたものであります。

さて津田仙氏は私の永年の知人でありまして、同氏は此の麻布の本村町に学農社と称する学校を

設立され自ら社長となつてこれを経営され、校舎や寄宿舎や賄舎などがあつて、各府県から来学せる数多の農学生を收容し、農業雜誌を發行し、米國より果樹・野菜・街路樹等の苗木や種子を取り寄せ、一応本村町の試験地で試作の上、日本の土地に適するや否やを見定め、各府県に分譲してその繁殖を計り、又米國より農書を取り寄せ、学農社の教師をして講堂に農学生を集め、これを口訳せしめ、学生は教師の口訳するのを筆記するという訳で、農業に関する当時の新知識や学理を日本全国に分布し、日本の農業の改善の為に非常の努力をせられていたのであります。

ところがこれ迄学農社の教師をしていた人が、海軍省へ奉職したいという事で学農社を辞任することになり、私が高の後任を引き受ける事になりましたので、私は学農社の寄宿舎に引き移り、寄宿生活をして毎日学農社の講堂において英語の農書を口訳し、多くの学生に筆記せしめて居りました。

ところが此の後幾年ならずして此の学農社は遂に解散の止む無きに至つたのであります。その訳は目黒の駒場に官立の農学校が出来ましたので英國より三名の専門の教師を雇い入れられ、一切の設備を終えて生徒の募集が始まつたのであります。これに於て私立の学農社はもはやその使命の終が来たのでありまして、強いてこれを持続する必要が無くなつたのであります。津田氏は遂に学農社は解散を決定し、收容の農学生はその望みに応じて駒場農学校へ入学せしむる事に取り計らわれました。

そこで私は津田仙氏の推挙によりまして当時の内務省の勸農局に奉職する事になりました。此の駒場農学校というのは今日の帝国大学農科大学の前身であります。而して津田仙氏の学農社は駒場農学校の前身となつた訳であります。

これに於て津田氏は学農社に於て使用してあつた一切の建築物を取り毀しその材料を以て、二棟の家屋を新築しました。その大なる家屋を津田氏の住居となし、小なる家屋を貸家にしました。此の貸家は西洋館でありまして私の住んで居りました寄宿舎を取り毀ち、その材料を以て新築したものであります。此の西洋館の貸家をコサンド氏が借り受け住家と定め、此の家屋を使用して基督教伝道と、女子教育の二大事業を開始されたのであります。

私は学農社を辞めましてから麹町の方に移り毎日官務に鞅掌して居りましたが、幾許も無くして病を得て一時帰國の止む無きに至つたのであります。帰國後凡そ二ケ年も経たかと思ひますが、幸に健康も回復しましたので、再び上京して神田の水道橋の附近に住居して大蔵省の印刷局に奉職し、毎日通勤して居りましたが、日曜日の休暇には、折々麻布本村町の津田仙氏の居宅を訪問したのであります。

ところが或る日曜日の朝、例の通り津田氏を訪問して色々世間話のあつた後で、津田氏は「時に海部君、君はこれまで永い間無信仰の生活を続けて來られた様だが大抵此処で見切を付け、何か國家の為に確実な仕事を為すよう決心してはどうですか、それには君の心の底に確固たる信念が無ければ駄目ですから、幸い僕の貸家にコサンドという米國の宣教師が住居して日曜毎に聖書の講義をして居りますから僕が案内しますから、これから一緒に行こうではありませんか」といわれました。津田氏は素より古くから熱心な基督教信者でありましたので、私もその氣になり誘はるゝまゝ津田氏に伴われ、同じ地内にあるコサンド氏の住家で兼てより見覚えのある彼の西洋館へと訪れました。

コサンド氏は喜んで我等を迎え、津田氏と共に席を与えられて、他の聴講生と共に聖書の講義を聴きました。これが津田仙氏の紹介により私がコサンド氏に面会したそもその初めでありました。この後私は日曜に必ずコサンド氏の聖書講義会に出席し、聖書の研究を続けることに努力して来りました。

ところが或る日曜日の朝例の通り出席し、講義会が終わりました後、コサンド氏は私に対し少々話があるからと、別室に招きいわるゝに「聴講生の大多数はいずれも英語が充分理解出来ぬので、甚だ遺憾に思つて居た次第であります、君は仲々能く英語を解せらるゝ様に見受けるから自分の講義を通訳して頂きたいのですが、是非御承諾を願います」と、意外の御頼みを受けたのであります。私も自分の練習になる事ですから、早速承諾して、その次の日曜日から私がコサンド氏の英語通訳を担当する事になりました。之が抑々私が真身になって聖書の研究を始めたのであります。斯くて私は幾年かを経る間に旧新約聖書全巻を通じて大体の研究が出来たのであります。此の聖書講義会は其の後段々発展して遂に五十年後の今日に至り、三田の聖坂に立派な会堂を有する日本基督友会聖坂友会と称する堂々たる教会となつたのであります。

又一方コサンド氏の妻女サラ・アン・コサンド氏は家に居て家事の傍ら少女を集めて、編物や洋裁や英語等を教授して居られましたが、之が追々体系を作り段々発展して五十年後の今日に至り、皆様の御覧の通り聖坂の丘上にその偉大なる美わしき姿を顕わして居る普通土女学校となつたのであります。是から其の発展の段階を追うて詳しく御話言続けたいと思います。

之を要するに普通土女学校も、日本基督友会も、両々相い併んで殆んど同時に同処に於て種蒔かれ発芽し、生長して、遂に今日の偉大をなすに至つたもので、兩者共其の発祥の地は実に東京市麻布区本村町にある津田仙氏の貸家の西洋館で、米国フィラデルフィア婦人外国伝道会より派遣された「クエーカー」派の宣教師ジョセフコサンド氏夫妻の住家であつたのであります。

或る日曜の朝、コサンド氏は「一寸待ち給え」と急に私を呼び止め、別室に誘い、言わるゝには「私は此度フィラデルフィア婦人伝道会の後援の下に此の住家に於て一つの女学校を設立する事になりましたので、私の英語教師として通勤している芝浦の攻玉社の藤田某という人は同社の学校の幹事を勤めて居られ、学校設立の事に就いては、仲々豊富な経験の持主であるので、文部省に対する手続きやら、学校規則の制定やら其の他一切の事を、同氏に一任してそれぞれ適当に取り運んで貰うように頼んでありますが、茲に困つた事は此の女学校の校長となり、之を守り立て、呉れる適当な人物が未だ無いのでありますが、如何でしょう、君に是非校長となつて働いて貰いたいのですが承知して頂け無いでしょうか」との交渉を受けたのであります。

そこで余り突然の事ですから私も一時は面喰いしましたが「一寸即答は致し兼ねますが、少し考えさせて頂きます。私が校長になるとしても、私の今の勤務先を辞めねばなりません、之を辞めずには私の後任者が出来るまで、辞職願を出してからどうしても二ヶ月位はかゝると思ひますが、それでもお差支えはありませんか」と申しましたら、コサンド氏は重ねて「それは決して差支えはありません。君の辞職の許可になるまでは、幾ヶ月でも待つ事が出来ます。それは攻玉社の学校の教師で、

久野英吉という人がありまして、藤田氏の手で其の方に頼み、正式の校長が出来るまで、校長として文部省の許可を得るよう取計るといふ事になっているので、その方の心配は全く無用であります」といわれたので、それならばと、私も遂に其場で決心して校長となる事を承諾しましたが、就任は未だ出来なかつたのであります。而うしてこの学校を「フレンド」女学校と称し、久野英吉氏を校長として文部省の許可を得、麻布本村町のコサンド氏の住家に「フレンド女学校」の看板を掲げ、茲に始めて今日の普通土女学校が呱呱の声を上げるに至つたのであります。

久野英吉氏が校長として「フレンド」女学校が設立いたしましたから、凡そ二ヶ月程経って、漸く私の辞職が聴許せられましたので、久野氏は予定の通り退職せられ、私は同氏に代つて校長として就任し、正式に文部省の許可を得て其の任務に当る事になったのであります。これが始めに申しました通り、明治二十年の十二月であつたのであります。一方御話がコサンド氏の聖書講義会に戻りますが、これも又日を追うて段々と出席者が増加し来り、仲々盛になつて来ました。

そこで或る日曜日の朝、多数の出席者の面前に於て、コサンド氏は「諸君も永らく、此の講義会に出席せられ聖書の研究も既に充分に為された事と思ひますが、如何でしょう、一歩進んで入信の決心が出来た方がありますれば、御遠慮なく挙手をして頂きたいのであります」と、英語でいわれたものですから、私は之を日本語で通訳し終つて直ちに右の手を挙げました。すると私に続いて一人、二人、三人、四人、と段々多くの手が挙つて来まして、遂に七八人か、或は今よく覚えていませんが、八九人に及んだかも知れません。そこでコサンド氏は泣かんばかりに喜ばれ、直ちに跪座して、感謝の

祈りを捧げられたのであります。それから、兼ねて用意してこられた小さい手帳を机の上に置かれ、

「只今入信の決心が出来て挙手された方々は、どうぞ此の帳面に御姓名を記せらるゝ様御願ひします。此の帳面には信仰の要領が記入されてあります。第一が独りの神を信ずる事、第二が救主「イエス・キリスト」を信ずる事、第三が聖霊を信ずる事の三項であります。之等三項に対する信仰を告白するため皆様の御記名を願うたのであります」と述べられたので私が之を日本語に通訳しますと、挙手した人々は順次に席を立てて机の前に進みそれぞれ記名を了し、私自身も記名して退きましたが、此の時記名した七八名か八九名の信者達こそ、米国フィラデルフィア婦人外国伝道会より派遣された宣教師ジョセフ・コサンド氏の活動に依つて出来た日本に於ける最初の友会の信者でありまして、其後いづれも聖霊に満たされ熱心燃ゆるが如き信仰の持主となり、聖書講義会は茲に解消されて麻布本村町の、「フレンド」教会というものが出来たのでありまして、此の教会が年月を経るに従つて、段々成長発展し、五十年後の今日に至り、遂に日本基督友会と称する立派な教会となつたのであります。

当時本村町の「フレンド」教会では毎日曜日の朝聖書研究会、それから礼拝会、夜分は説教会が開かれる様になっていました。又木曜日の夜は祈禱会が開かれました。当時の信者方は皆熱心に之等の各集會に出席され教会拡張の爲、非常な活躍をされたのであります。これに於てコサンド氏の数年来の苦心が始めて酬いられ、之が具体的に表面化されたのでありまして、天も人も喜ぶという好結果を來たす事となつたのであります。

之等入信記名者の中には当時法律学校の生徒で、後、判事となり米国に留学して法学博士の称号を

得、帰朝後横浜に於て弁護士となり、且つ市會議員となりて活躍された山田福三郎氏があり、当時帝大の工科に於て建築科に在学せられて居た樋口氏があり、矢張り帝大の工科に在つて土木科を卒業し、宮内省に奉職されし藤田某氏がある等、仲々人物が揃つて居ましたが、今では、皆な此の世の人では無いのであります。之等の人々は皆熱烈な信仰を有し、殊に山田氏の如きは祈ると顔が天使の如くなるといわれた程に、火の如くに燃え立つ信仰の持主でありました。

さて「フレンド」女学校が出来ましたのは前にも申しました通り麻布本村町のコサンド氏の住宅西洋館二階十二畳敷き位の広さの一室でありましたが、此の狭い、一室に長い机や、長い腰掛を並べて、毎日授業をされたのであります。日曜日の朝や夜や、又木曜日の夜になりますと、此の一室が忽ち變つて教会の信者達の集会場になるのであります。勿論信者達の中には女学生も相当にありました。が、兎に角女子教育と基督教伝道とが同時に行わるゝという有様で両者の関係は、実に密接なるものがあり、互に相い倚り相助けて、双方共に順路を追うて其の歩を進めるといふ事に自然となつたのであります。例えば女学校に来る生徒の家族は教会に出席する様になり、教会に来る人々の娘や姉妹は女学校に入学すると云う風に、双方密接な関係を保ちつゝ、女学校は即ち教会、教会は即ち女学校と云つた有様になつたのであります。これから段々お話を続けて参りますと、或いは泣かねばならぬ様な事もあり、或は笑わねばならぬ様な事も数々あると思ひますが、お話は自然と女学校と教会との両方面に涉り、互に相影響しつゝ、一歩一歩と其の歩を進めて行く事になりますから、此の事を御承知お願ひしたいのです。

そこで御話は又女学校に戻りますが、「フレンド」女学校は前にも申しした通り型の如く成立しました。「フレンド」女学校の看板は掲げられ、規則書も出来て、教師も揃ひ、教場としてはコサンド氏の住宅西洋館二階十二畳敷き位の広さの一室でありまして、学校という外形だけは整いましたが、然し其の内容に至りましては充実どころか全く空といつてもよい有様であつたのであります。

学校はあつても生徒は無いという珍妙な有様なのです。そこで校長としての私にとつては何よりも先に入学の生徒を多数に獲得せねばならぬのであります。ところが当時に在つては今日の様に、生徒募集の広告を新聞紙に掲載するという事は、余り無かつたのであります。そこで私は生徒募集の爲め家庭訪問を思ひ付いたのであります。恰も今日の議員選挙の時各家庭を戸別訪問して投票を頼み廻るのと同様な有様なのであります。私は芝区、麻布区、其の他各区に涉つて足に任せて、家庭の戸別訪問を始めました。当時学校の附近には海軍の軍人が多く住居されて居ました。御主人は始終軍艦に乗り込んで御留守なのであります。奥様方は常に家に居て家事に当たられ、淋しい生活をされて居たのであります。

そこで近い処から手始めにこれ等の軍人の御家庭を訪問し、奥様方に面会して「如何でしょう、御近辺に「フレンド」女学校という学校が出来まして、私が其の校長の任に當つて居るのであります。が、御家の御嬢様方を此の学校へ入学させて頂く様御願ひ致しますのであります。」といひますと、奥様は「私の家には未だ学校に上げるような娘を持ちませんが、何れ将来か様な娘を持ちましたら是非御願ひ致しますと思ひます。」との返事でありましたので私は「然らば如何でしょう、貴女が一つ御奮発なされて入学して下さい」と申しましたら奥様は大いに笑われ、「私の様な老女が学校に入学する等



とは、世間の物笑いになりますわ。」といわれました。そこで私は更に突っ込み、「イヤ、決してそうではありません。御主人様は必ず将来外国人との御交際も多くなつて来らるゝこと、思いますが、其の時に奥様が英語の一つも話す事が出来ず、解する事が出来ぬとありましては、ただに奥様が自身の御狭いばかりでなく第一に御主人様の大変な御恥辱となります。他の学科はさて置きましても英語科だけは是非御修学なされた方が好いと思います。幸いに教師は米国婦人でありますから、発音も本式で英語を学ぶには、此の上もない好都合であります。」と説き勧めますと、奥様は非常に喜ばれ「成る程御説至極御尤もと存じます。然らば此の御近辺には軍人の奥様が段々住んで居ますから、私から御勧めして御一緒に学校へ参る事に致しますから何分宜しく御取り廻しを願います。」と申され、それから二、三日も過ぎて洋服姿に「オペラ・バッグ」(ハンド・バックの事)を携えた立派な奥様が二、三人或は四、五人と学校に來られて、入学の手続きを了し毎日熱心に通学されて、「イット、イズ、ア、ドッグ」とか「アイ、ライク、ドッグ」とかいう風にコサンド夫人の指導の下に英語の学習が始まったのであります。

此の有様に力を得た私は足の疲れも更に苦にせず盛に戸別の訪問を続け、各家庭の親御さん達に向い其の娘子さん等を女学校に入学させらるゝ様極力勧誘しましたが、茲に一つ甚だ困つた一事のある事を発見しました。それは外ではありません。此の当時の親御達の頭の中の思想であります。孰れの家庭を訪問しても親御達のいう所は、ただ次の一事に止まるのであります。此の一事は昔から當時に至るまで親達の頭の中から離れなかつた代々の思想でありまして、五十年後の今日の皆様には、一

笑だにも値いせぬ馬鹿々々しい事なのであります。それは勧告に参つた私に向つて親達の申すには、「女学校を設立して女子に学問をさせるとは、これは実に以ての外的事であります。女子に学問をさせば、女子は必ず物知り顔になつて理屈を捏ね廻し、昔から今日に至るまで女子に欠くべからざる従順性というものを失ない、幸いに嫁し付いても両親に逆い、主人を下敷きにし、結局は離縁という事になつて、里方に追ひ返されるのが落ちであります。女子には矢張り、昔からの慣習に従ひ裁縫や炊事や拭き掃除などの家事の仕方を充分に教え込めば夫れで沢山であります。女子に学問をさせ、加るに英語などを学ばせるとは実に以ての外であります。之は即ち女子の一生を誤らせる事になります。女学校などは速かに御止めになつた方が良いかと思ひます。」というのであります。いずれの家を訪問しましても、親達の言う所は是の外は無いのであります。言辞こそは違え思想は皆同一であります。之を要するに女学校の出来たのを歓迎するのではなく、かえつて之を蛇蝎視して居る有様であります。是では「フレンド」女学校に入学生も多く来らざるのも無理では無いのであると私は大いに悟る所があったのであります。娘は学校に行きたくとも親は之を許さないのであります。是に於て私は大いに考えた結果「フレンド」女学校成立の爲には、各家庭の親達の頭の中から女子教育無用説を追い払い、女子教育有用説に転向せしむるよう努力せねばならぬと決心したのであります。それからというもの、は訪問毎に親達に向い「御説は至極御尤もと思ひますが、然しそれはただ目先きのみの御考えであつて遠く将来を御覧にならないからであります。」

「若し貴君が遠く五年拾年或は拾五年と、来る可き将来を御見透しになれば仲々以て其の様な御考えでは、遂に娘子さん達の将来を全く誤るようになる事は必然であります。今や世の中は長足の進歩をして居ります。今日の世界と五年拾年後の世界とは全く別物のようになつて来るのは必然であります。男子の為には既に多くの学校が出来て居りまして、盛んに新知識の教育を施されて居ます。然るに、将来此の豊富なる知識を有する男子に伴つて、世に立つて行かねばならぬ運命を有する女子が、如何に裁縫や炊事や其の他の家事に、充分熟達したとしましてもそれだけで、無学文盲全然無教育ということでは、誰れが之を一生の伴侶者とし内助者として、歓迎するものがありましようか、知識豊富な男性と無学文盲の女性とは、共に円満なる家庭を作ることとは出来ませぬ。之を要するに、将来は女学校の卒業生でなければ、相当の家庭に縁付くということは、全然不可能になりましよう。女子に学校教育を受けさせずに置くということは、取も直さず、その女子の将来を見殺しにするのと同様であります。親としては大いに考えねばならぬことであります。今仮りに貴君の娘子さんを、私方の学校へ御入れになれば、五、六年の後御卒業の際には、社会は喜んで之を立派な家庭に迎え、好伴侶者として之を遇し、榮ゆる家庭を作り、国家の爲めに至大の貢献をなさる様になることは、自然の數であると思ひます。どうかなおよく娘子さんの将来の爲めに御熟慮あらんことを願ひます。」と女子教育無用説を説破しつゝ、家から家へと訪問を続けて居りましたが、その内に今日は一人明日は二人と、父親や母親が、娘達を伴れて学校に來り「先日は色々とお親切に御説明を頂きまして一同能く了解を致しました。今日は娘を伴れて参りましたから、入学させて頂きます。何分に宜しく御願ひ致します。」

「入学手續お願いいたします」と申出るものが、続々と出で來り、入学生は日を追うて段々増加するようになりました。是に於て私は戸別訪問も仲々有効であつた事を痛切に感じたのであります。然るに年若い娘さん達が学校へ入学して若い生徒が沢山になりますと洋服を着て「オペラ・バック」を携えた奥様方は、どうも何となく極りが悪くなつたものか次第に学校の教室から其の姿が消えるようになりまして。

さて婦人が進んで学校の校長となり、婦人が出で、社会事業を営むといい、婦人が女医となつて病氣を治療するといふ、婦人進出の旺盛なる今日の時代に於て、以上の如き御話を致しますれば、或は全く偽言かと御思ひになるかも知れませんが、五十年前の当時にあつては全く實際の事実でありまして、今日では百名の女生徒を募集しますれば、二百名も押し掛けるという女子教育の高潮した時代となりましたが、変れが変る世の中で私は何とも今昔の感に打たれざるを得ないのであります。

女学校は段々と盛大に赴きましたが、盈つれば欠くるの格言の通り、茲にまた困つた問題が起つて來たのであります。それは学校の生徒の幾名か、何かの欠点があつたため、先生にその欠点を指摘され、厳しく叱責されたのであります。するとその生徒達は、非常に憤慨し、此の様な学校に居るのは嫌だ、速かに退校しようといふので、此処の隅、彼処の蔭と、三々五々寄り集まって密々小聲で囁き、聯袂退校の相談をして居るのであります。然るに此の退校の交渉が段々拡り拡がって、遂に當時の熱烈な信仰の持主であつた富井松子という女学生にまで及んで來たのであります。此の富井松子という女学生は当時飯倉の紙屋の娘子でありまして、其の風采が実に珍妙なのであります。

着物は膝の下位までしか垂れていません。学用品を風呂敷に包んで小脇に抱え肩を怒らして歩く後ろ姿は、若し之に両刀を挿すれば、取りも直さず昔の薩摩武士そっくりであります。然し非常に和で義侠心に富み、勇気があります。そして非常に能く親切に人の世話をする少女でありました。此の松子さんに向つて退校の交渉を始めたのですから堪まりません。松子さんは忽ち肩を怒らして立ち上り「皆さん、我々に欠点がある為に先生はこれを矯正せんとて、御親切に叱責して下さいたのであります。然るに之を憤慨して学校を退学する等とはもつての外の悪事であります。先生に御礼を申して、一層勉学に励むこそ我々の本分であります。私は善事には如何なる事でも賛成しますが悪事には一切参加することは出来ません。皆さんが退学するなら御勝手に退学されたが宜しい、私は一人で居残つて此の学校を盛り立てねばおきません。」と言ひ放つて怖ろしい権幕で一同をにらみつけたのであります。

此の富井さんの一喝を喰つて、一同は忽ち僻易し、暫く無言の後其の中の一人が涙を流して進み出で、富井さんの手を取つて「富井さんどうぞ恕して下さい。私等が誤つて居りました。我々が悪いのであります。私は決して退校しません。御恕下さい。」と申し出でましたら、他の不平の生徒等も、「私も退校しません」「私も退校しません」と続々不退校の声が上がつて来まして、遂に全校生の不退校と決定するに至りました。そこで富井さんは、ひざまずいて感謝の祈を捧げた後一同に向い「然らば此の事はここ限りにして、決して他言せぬように致しましょう。」と言ひ渡し一同を引き取らせたのであります。私は固より斯様な事件のあつたことは、当時は少しも知らなかつたのであります。後に至つて此の事を伝え聞き胸が冷やりとしたのであります。幸に富井さんの力によって何事もなく

此の事件が解消しましたので私は非常に喜んで感謝の祈を捧げました。此の事は多分日本に於ける学校「ストライキ」の最初のものであつたかも知れませんが、然し蟻の穴から堤の崩れる譬えの通り、些細な事から大事が生ずるのであります。幸に富井松子という、隠れたる一少女の力によって此の無謀なる学生の「ストライキ」を未発に解消せしめた事は何とも感激の外はないのであります。

此の事のありし以来、富井松子の名は自然と方々に拡がり、斯様な女学生の居る学校へ、斯様な信者の居る教会へと、学校も教会も共に益々栄え行く有様となつたのであります。此の富井松子さんは、将来学校なり教会なりで大切な役割を務むる婦人となられると思ひ、私は非常に嘔目して居りましたが、其の後私が米国へ留学の為三年余り留守にして居りましたが帰朝した頃には、松子さんは肋膜炎に冒されて瀕死の大病となり、私は帰朝後直ちに其の病床を訪れました時はもう今日か明日かという、物をも言えぬ悲しい有様になられて居りましたが、さすが信仰の厚い婦人だけに病床に近く座して居ました私の手を取つて「先生永らく御世話になりました有難たく御礼申し上げます。私は御先きに聖国へ参りますから、後の事を宜しく御願ひ致します」と声も切れぎれに話されまして「ニコリ」と笑ひて眼を閉ざされました。斯くて其後間もなく永眠ということになりました。

誠に惜しみても惜しみても幾度び惜しみても、足らないことではありますが、此の時の富井松子さんの笑顔は、今日に至るまで私の頭の中に残りて消えません。

女学校の生徒は如斯く段々に増えますが何分にも教場が狭くて教室が無いのはどうにも仕事が出来なくなりましたので、コサンド氏は、米国の伝道会へ交渉の結果、幸に同氏住宅の後方に可成り広

い空地がありましたので、当時地主であった津田 仙氏の 承諾を得て此の空地に、一棟の平家を新築し、其の内の一室をコサンド氏夫妻の居室とし、他を悉く寄宿生の宿舍とし、従来のコサンド氏の住家の全部を挙げて之を「フレンド」女学校に引き渡し、新たに幾個の教室を作って大いに教育の拡張を計るに至ったのであります。

斯くして幾年かを過ぎましたが、生徒は益々増加する一方でありましたので、遂に又再び痛切に教室の不足を感じるに至り、コサンド氏は更に米國伝道会へ交渉の結果、新たに他に土地を買求め、之に女学校と教会堂と宣教師住家の三棟を新築し、全部之に移転することにされましたが、斯くするに就いては第一に適當の土地を求めなければならぬ事になります。然るに幸いにして芝浦の攻玉社の藤田氏の御世話で神谷という方を送られ此の方の周旋によりまして芝の聖坂の功運寺という寺の、昔の墓地であつて草蓬々と生い繁つた空地がありましたので之を買取することに極めました。ところが当時でありましては治外法権の制度がありまして、外国人は日本の内地に於て土地を所有することは、禁制であつたのでありますから、コサンド氏の懇請により、止むを得ず私の名義で此の土地を買取ることになりました。尤も後年に至り治外法権は撤廃され、普連土女学校には、財団法人が出来ましたので、私の名義になって居りました、不動産全部は之を此の財団法人に悉く引き渡すことに致しました。

さて土地が出来ましたので直ちに土木を起して、地ならしをなし、石垣を作り、前に申した三棟の建物を建築するに適するよう、地形を作つたのであります。夫れから一方、又彼の攻玉社の藤田氏の御世話で当時築地に住居せし、大工の棟領を送られ、右三棟の家屋の設計やら、図面やら、建築見積書等を作らせ、愈々建築工事に取り掛かることになり全部出来の上、遂に移転を完うすることになつたのであります。是迄は学校も教会も同一場所で経営されて居たのであります。是に於て学校は学校の建物へ、教会は教会の建物へ、宣教師は宣教師の建物へとそれぞれ相い分れて各自の仕事をして互に連絡して全局の發展を期するに至つたのであります。学校は二階建てで、二階は全部寄宿生や、舎監の居室に用い階下は講堂や教室や教員室や事務室に充てられ、外に外国婦人教師の居室と料理人室等がありました、いよいよ本格的の「フレンド」女学校の形態を具備するに至り、其の面目を一新し、毎日の礼拝も是迄とは違い、広々とした講堂で行われ、職員生徒一同の気分も晴れれしくいづれも喜色満面に溢れ、各自元気に満ちて其の仕事に従事したのであります。又是迄は「フレンド女学校」と書いた看板を、麻布本村町のコサンド氏の玄関に掲げられておりましたが、移転後は更に大きな看板に、前に申した女学校創立の当時より女学校の事務員として、専ら書記記録の任に当られていた久野宗熙氏の執筆で「普連土女学校」と書き改め、聖坂の道路に面して建てられた太い門柱に掲げられることとなつたのであります。

ところが此の学校の建物の全部は、其後不幸にして火災に罹り灰燼となつてしまいましたので、今度は校舎と寄宿舎とを別々に建築する事となり、其の校舎や寄宿舎の一部は今も尚存在して近年に至り立派に増築された幾個の建物と共に、三田聖坂の丘上に於て、栄えに栄える普連土女学校の最とも美わしき姿の一部を為して居る事を思い、又「フレンド」教会の会堂も、新築以来永年の間、教会伝道の為大いに使用されましたが、其の後此の会堂は取りこわされ、新たに立派な会堂が建築され、名

称も日本基督友会聖坂友会と改められ、之に加うるに幼稚園も出来まして、殆んど教会事業の完成を告ぐるに至りましたことを考え更に又近年に至り、当時宣教師の住家として建てられた家屋も取り毀わされて、女学校の一部に入れられ立派な新築の建物の出来ましたことは、普通土女学校に一段の美を加うるものでありまして、女学校なり教会なりの斯の如き偉大な発展を為すに至りましたことは、前後相次いで輩出された内外有力の方々が相い倚り相い結びて、夫れぞれの役割を忠実に勤められ、学校も教会も共に今日の美と大とを致すに至りましたことを目撃しまして、私は無量の感慨に満たされ、感謝の涙を禁ずることが出来ないであります。

私は前にも申し上げました通り明治廿年の十二月より女学校の校長としての任務に就き、皆様の御世話になりましたが、学校も教会も聖坂に移されてから、先ず任務の一部を終えましたので、米國に留学することになり、三ヶ年余り足掛け四年ほど留守にしましたが、帰朝後再び校長の任務に就き学校と教会のため又大いに活躍を試みました。而して前後を通じて今日では能く記憶しませんが、大低廿六七年間位勤務の後、校長の職務を平川正壽氏に譲り、専ら教会伝道の事業に従事することになりました。

又平川氏も爾来十数年間、女学校の校長として大いに活躍されましたが、後又校長の職務を現今の富山時子姉に譲られ、専ら日本友会年会の主事として働かる、様になり、富山校長の努力によりまして、普通土女学校の今日の事業が立派に行われておりますことは、皆様の御承知の通りであります。又創立以来永らく日本に於て働かれしコサンド氏夫妻に代りてポールス氏夫妻が来朝され、女学校

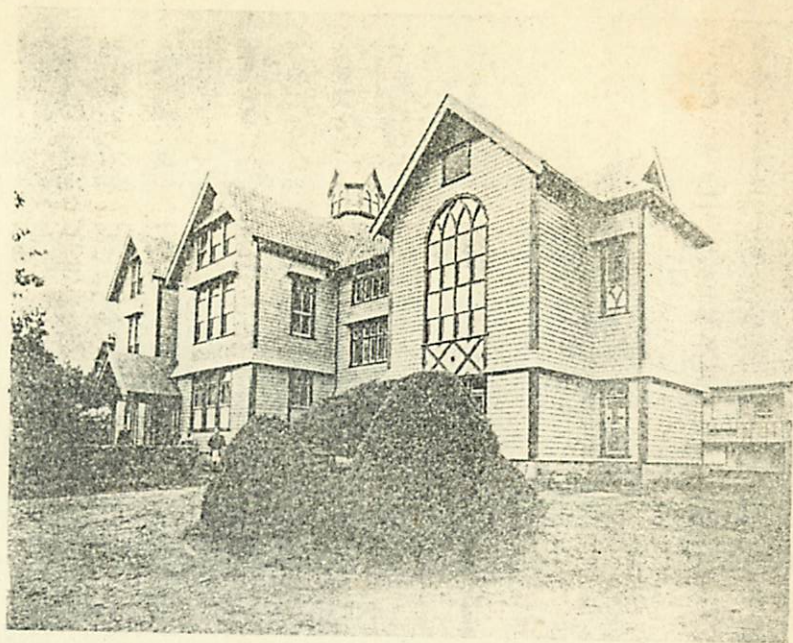
及び教会の各般の事業に当らるゝ内外の諸君と共に、手を携え力を合わせて、女学校に就ては其の独立経営の基礎を作られ、教会に対しては年会、四季会、月会等の友会本来の体系を定め、同じく将来独立経営の基礎を置かれ、今尚日本に於て活躍されつつあることは是又皆様の御承知の通りであります。

女学校の起源及びその発展の有様は略々の前述の通りであります。擱筆するに臨み、攻玉社の藤田氏に向つて大いに感謝の意を表したいのであります。藤田氏は当初コサンド氏の依託を受けて、普通土女学校の創立を助けられ、学校規則の制定やら、文部省への出願やら、又在任は僅かに二ヶ月位なれども兎に角女学校の最初の校長として、久野英吉氏を送られ、又女学校創立の当初より女学校の事務員として、其の任務を尽され且つ私等と共に、本村町の教会に於て最初の入信者として記名せられ、爾来熱心な信仰の持主となり、女学校や教会の為多大な努力を続けられし久野宗熙氏を送られ、更に又学校敷地買入れの為神谷某氏を送られ、建築工事の為大工の頭領を送られる等、其の女学校や教会の為に尽された努力は、実に偉大なるものがありますので、我等は決して藤田氏の御好意を忘れてはならぬのであります。最後に於て、私は昨年十二月を以て齡八十を満了しましたので、只今は八十一を目標として、此の世に生きつつありますが、全く老朽して何事も出来ません。ただ祈禱を以て昔に変わらず神様に御仕え申して居りますが、幸に此の度挙行せらるゝ五十年記念祭を目の前に見ることが出来ましたのは、何とも感謝の外はないのであります。

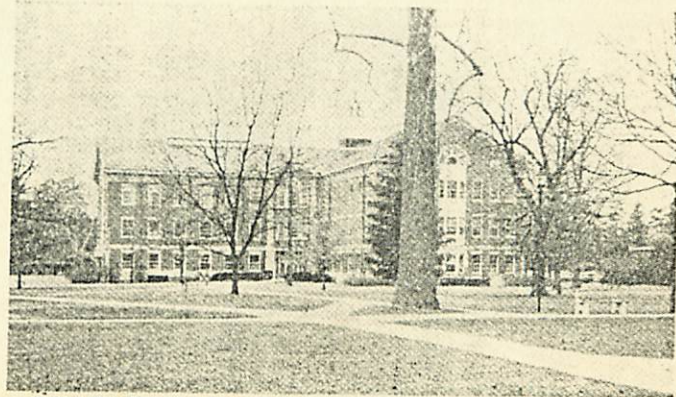
茲に皆様の私に与えられたる永年の御厚誼に対し厚く御礼を申し上げます。

皇天の御祝福、弥よ皆様の上に豊かならんことを祈るのであります。

以上



最初の校舎焼失後、明治36年9月新築された校舎。中央の塔には「神は愛なり」の聖句が掲げられていた。



海部忠蔵が学んだアーラム大学

## 祖父「海部忠蔵」について

海 部 英 一 郎

普連土学園から、海部忠蔵について何か資料を、と御依頼をうけました。ところが学園と同様、戦災で資料らしい資料はすべて焼失しており、やむなく、長男忠雄（昭和四十八年物故）、現在健在の三男忠義（90才）ほか生前の忠蔵を知る人達の記憶を集めて、祖父「海部忠蔵」のプロフィールを綴ってみることに致しました。

### 一 生いたちと生活の記録

- (1) 徳島から東京へ
- (2) 普連土女学校の校長時代
- (3) 退職後

### 二 人間「海部忠蔵」

### 三 遺族のひろがり

- (1) 現 況
- (2) 一族の中の普連土学園卒業又は中退者

(一) 生いたち

(1) 徳島から東京へ

安政四年（一八五六）一月一日 阿波國海部郡（今の徳島県日和佐町の附近らしい）に生まる。母はもよ、父の名は不詳だが、蜂須賀候に仕える士族であった。先祖は海部藩の主であったと云われ、戦国の頃、長曾我部元親に攻め亡ぼされ、蜂須賀候に頼って家来となった。四国のこうした土着の武士は、その後徳川幕府によって封ぜられた藩主、いわば占領軍の家来の「上士」に対し、「郷土」と云って一段下にみられていた。忠蔵の父は殿に土下座することによって腸を冷やし、若くして亡くなった。忠蔵が封建社会に対し激しい憎悪をもち、ひいてはこの時代に珍らしくキリスト教に興味をもつに至ったのも、この父の死に方をみたためであった。

もう一つ、忠蔵の将来に大きな影響をあたえた事件が徳島時代に起きている。それは十五、六才の頃、日曜学校のごときもので米国の宣教師ブラウン氏に教えをうけたことである。これが教育の機会の少ない当時として、通訳ができる程度に英語を話せるようになり、東京で米国の宣教師と交際する機会をつくるに役立ったと思われる。

徳島で志な女と結婚、明治十三年（一八八〇年）長男忠雄誕生。

明治十三年二月、名東郡北山路町四番地にて海部塾（英学及び農業学）を開塾。（資料は後に

掲載する。）\*註2

明治十四、五年（一八八一、二）母もよと妻子をともなって上京。

(2) 普連土女学校の校長時代

明治二〇年（一八八七）十二月、それまでの名儀上の校主であった久野英吉氏にかわって逓信省（いまの郵政省）の官吏だった忠蔵が普連土女学校の初代校長になった。（註1）

翌二一年次男次郎生る。

明治二十二年（一八八九）校舎を麻布本村町の仮校舎から三田功運町の現在の場所に移す。

（普連土女学校の起源と発展について 海部忠蔵 文）

米国のミッションから監督のジョセフ・コサンド氏（宣教師）を通じて「普連土女学校の校長、海部忠蔵を、もし当人にその気があるなら、米国の大学に留学させてもよい。何でも好きな学課を学ばせ、費用はすべてミッション持ち」との通告があった。

忠蔵は大いに喜んで、母もよと自分の妻子志な、忠雄、次郎の四人を芝区三田豊岡町六八番地の借家へのこし、渡米の決心をした。

留学中の校長代理は新渡辺稲造氏にたのんだ。ちなみに当時の校長の給料は月四拾円だった。

明治二十三年（一八九〇年）夏、横浜から米国の汽船チャイナ号で、サンフランシスコに向った。志な、忠雄の二人は横浜まで見送った。

この時忠蔵は三十五才、長男の忠雄は十一才であった。

米国ではインディアナ州のアールハム (Earham College = Richmond, Indiana Province, USA) と云う学校に入学、もちろん男女共学で、忠蔵は土木学を専攻にえらんだ。

明治二十六年(一八九三年)夏、優秀な成績で同校を卒業、Bachelor of Science (米國理学士)の称号をあたえられ、豊岡町のわが家に帰る。志なと忠蔵は横浜まで出迎え、宿屋で三年振りの水入らずの食事をたのしんだ。明治三〇年(一八九七)三男忠義生る。

明治三十三年(一九〇〇) コサンド氏帰國

明治三四年(一九〇一) ギルバート・ボールス氏来日、同氏との長い交友始まる。

明治三五年(一九〇二) 校舎焼失。 明治三六年(一九〇三) 校舎再建。

忠蔵は校長をつとめるかたわら、麻布区新堀町四番地の自宅で、近所の子供達をあつめて毎週日曜学校を開いた。

また、男女の親のない子供を預って、いわば今の孤児院のようなことを私費でやっていた。むろん物価の安い当時でも、校長の給料だけでは足りず、石鹼や歯みがきを作って売ったり、貸家から上る収入をその費用にあてたのだった。

この孤児院から有名な人が何人も出ていけば話としては面白いのだが、残念ながらそういう話もない。ただ七才で母を失なった前田清子が遠い縁つづきで徳島から出て来て預けられ、三男忠義と結ばれ、九十一才と八十五才の今日までより添って幸せに暮している。

明治四五年(一九一二年)三月 普連土女学校退職 五十七才

余談ではあるが、北村透谷(詩人・普連土女学校教師)が、英国聖書会社が新聞紙上で翻訳者の募集をしたおりに応募し、合格した。その時の試験委員中に普連土女学校長 海部忠蔵 もいた。

これにより透谷とフレンドとのつながりが生じたとのことである。(註3 現代日本文学大系 6

北村透谷・山路愛山集 年表 キリスト者としての透谷 より)

### (3) 退職後の生き方

退職後はキリスト教の伝道一途の生活となった。

日暮里など数カ所に教会へと云っても人の家を借りた粗末なものだが……)を作り、巡回して説教をしたり、街頭に立って辻説教を行った。

一族郎党を引きつれ、提灯をつけて芝公園など目めきの場所に立ち、説教をし、讚美歌を歌った。

大正七〇八年(一九一八)九 渋谷区大山町十六番地に移る。

大正一二年(一九二三) 関東大震災 六十八才

昭和八年(一九三三) 渋谷区代々木富谷町一四八八番地に移る。

この時分になると、外に出て伝道することはなくなったが、「天喜人」の言葉を好み、額やリーフレットにして訪れる人に配った。

昭和十五年(一九四〇) 最後の日米交換船でギルバート・ボールス氏婦米、富谷町の自宅で、



この国境を越えた老いた親友同志は、手を握り合い、涙を流して別れを惜しんだ。  
昭和十六年（一九四一） 九月九日、老衰のため死去。八十七才

## （二） 人間「海部忠蔵」

「一口に云って事業家でした。ともかくシャキッとした男前で、次から次へ仕事をしなくては行かないタチだったと思います。反面ものすごいワンマンで誰もさからうことは許されません。私は八つの時から引取られて養育して戴いたのですから、学校が終って暑い日も寒い日も提灯をもっていやな街頭説教の手伝をさせられました。妻にも手伝わせて一言も云わせませんでした。」（清子）

「わたしは孤児と一緒に鶏小舎同様の所で育てられた。新堀町の家の門の近くに物置があり、その屋根の上に小舎を作って孤児たちを收容していた。日曜日になるといやだったなあ。友達はみんな近くの品川の海に泳ぎにゆくのに、わたしだけはゆかしてもらえない。その小舎が日曜学校になるのだ。ちかくの貧しい子供達はさいごにくれる徳島の丸い菓子が目あてで集まってくる。菓子をもらってしまえば「ヤソ」「ミソ」と悪口を云いやがるんだ。」（忠義）

筆者は十一人の孫の中でいちばん年が若い。一緒に暮したのも晩年の十年間だけである。月三十銭ずつ小遣

いこそくれたが、何かいたずらをするとうすぐ歯をくいしばって現われ、柱にしぼりつける。ともかくきびしい、いやなじじいであった。その上、家に連れて来たわんぱく仲間、家庭訪問の先生にまで自筆の「天喜人和」のリーフレットを渡して、うっかりすれば説教まで始めかねない。これには閉口した。

しかし今日、父や母の話を書きながら思い起す祖父の像はもっと違ったものになっている。

信念と実行力とアイデアに富んだ、男としては第一級の人物であったと思う。まず封建社会に反抗してキリスト教に飛びこむ。校長になって「学校づくりはまず生徒の募集から」と家庭訪問をし（註2参照）自分の妻まで第一回生に入れて、生徒の増加をはかる。日曜学校はひらく、孤児を預る。辻説教をする。かたわら貸家を作って、三人の子供を上は商船学校、下の二人は東京帝大と最高学府に学ばせる。体がきかなくなれば、書いたもので三才の子供にまで「人の和」を説く。がむしゃらに自我を押し通した祖父忠蔵に深い尊敬と親近感を感じるのである。

余談だが、筆者が小学校に入るか入らないかくらいだったと思う。既に時効だから書くが、或日散歩の途中、出来たばかりの渋谷東横百貨店の食堂で祖父が泡の立つ不思議な飲物をのんでいるのを見た。自宅で飲むと工合のわるいビールであった。筆者もせがんで飲ましてもらって、いまにして思えば、酒に弱い父に似ず三百六十五日、体内からアルコールの消えることがない程、酒好きになったのも、祖父の薰陶によるものかもしれない。（英一郎）

こんなにも情熱的に明治の御代に文明開化の先がけをした祖父が、何故新渡辺稲造氏や津田仙氏の如く名を成すこともなく、又晩年は麻布にある貸家の家賃収入を生活費に当て財を成すこともなく一生を終えたのか不思議でした。今考えると彼の生き方は不器用であり、又宗教家の枠からはみ出していたのだらうと思います。

私は祖父にとって晩年の幼い孫娘だったので可愛がって下さり、散歩などに連れ歩き、よく神様のお話を聞かせられたものでしたが、遂にクリスチャンになれなかった。聖書に語られている教えは人間にとり必要なことだとうなずけるのだが、それが人から教えられると何か偽善的でないやだった。例えば一つの例として、学生運動のはしりといえる集団退校騒ぎを一喝しておさめた女傑といわれている「富井松子さん」という女学生が、当時普連土の教師をしていた北村透谷と恋愛をしていたという話は、真面目だといわれる彼女のイメージをスポイルするものだという記事があるが、むしろ若くして世を去ったこの、昔の女学生が透谷とのロマンスがあった方が美しく美しいのに、だからクリスチャンの考え方は独善的で可哀です。

逆説めくが基督者としてやや異端視されていたらしい祖父に何かすごく同情を感じ、せめて私が彼の遺業を一巻に編集してあげたく思いました。

又七才の時から祖父の孤児院で養育された恩を思い、祖父の世話（例えば大変集金の困難な店子達からの家賃の取立）をし、最後をみとり見送り、教師の父を助けて海部の家をひたすら守ってきた母にもこの本をささげたいと思います。

「一粒の麦地に落ちて死なずは必らず五十倍、百倍の実を結べり」と聖書にあります。

百年前に祖父が耕やした土壌の上に、今曾孫たちがそれぞれの道で学んでおります。

又、祖父が説いていた「人の和」を私は不勉強だったお詫びに生涯の座右銘にするつもりです。

その昔 幼きわれに 神の愛

説きつ流せし祖父の涙よ

情熱の人にありせば 時に燃ゆる

煩悩の火もありしとぞ思う。

(みどり)

(三) 遺族のひろがり

(1) 現況

平成元年二月現在、忠蔵の家系は次のとおりとなっている。

子供 男三名(うち二名死亡)

孫 男五名、女六名(うち男三名死亡、女一名死亡)

曾孫 男十一名 女十八名(うち一名死亡)

曾々孫 若干名

計 四十数名(うち七名死亡)

長男 忠雄(故) 東京都江戸川区南小岩七一九一二 長谷川堅二方長女幸子

電話 〇三(六五七)三九一八

次男 次郎(故)

三男 忠義 神奈川県藤沢市片瀬四一九一四〇

電話 〇四六六(二二)八三二七

(2) 一族の中の普通土学園 卒業又は中退者

氏名	卒業回数	続柄
海部 志な	一回中退	忠蔵妻
" 豊子	一五回生	忠蔵妻
" 清子	三〇回生	忠蔵妻(校費生)
長谷川 幸子	三八回生	忠蔵長女
千恵子	四二回生	" 次女
丸井 みどり	五二回生	忠蔵長女
" 明子	九〇回生	みどり次女

以下、新聞その他各資料を原本のまま掲載する。



(註1)

徳島市民双書

「阿波の洋学事始」

一九八三年一月発行

著者

佐光 昭二

発行所

徳島市立図書館

中井 芳楠 (一八五三—?)

和歌山県出身(士族)で、明治五年慶応義塾に入塾。同八年四月より大阪分校の教授となり、つづいて同九年一月より六月までの間、徳島分校の教授となった。

塾生略伝

ほとんどもが不明。分かっている範囲の記録だけにとどめておく。

渡辺伸一郎

明治八年九月二十九日入社・十九歳八ヶ月・身分平民・入社証人は渡辺術平。明治十二年四月より同十七年九月まで、徳島尋常中学校の英語教諭として在任した。

井出徳太郎

安政五年、徳島助任村五二三番地に藩士の子として生まれた。明治八年十月四日入社・十七歳三ヶ月・入社証人は井出清吉。同十一年十月一日、さらに本塾にはいった。後、交詢社員となる。

桜間要三郎

明治八年十一月十六日入社・十六歳七ヶ月・身分士族・入社証人は賀川玄庵(純二)。後の徳島における自由民権運動の幹部となる。

高木 貞衛

安政四年、徳島に生まれた。号を宗龍といった。徳島藩士真蔵の長子。明治九年初め入社。自助社々員となる。後年、新聞記者(大阪日報、大東日報、大阪毎日)として活躍した。昭和十五年十月二十二日歿。

宮崎 才次

明治九年四月

六日入社・十六

歳五ヶ月・身分

士族・入社証人

は宮川彦蔵。後、

自助社々員とし

て活躍した。

本人姓名	宮崎才次
用紙	名簿
住所	徳島市
入社年月	明治九年四月六日
入社証人	賀川玄庵
入社料	五円
備考	宮川彦蔵の長子

宮崎才次の記名  
(徳島慶応義塾姓名録)

その他英語専修の学校

英語を教授する私塾については、この徳島慶応義塾廃校後、明治十三年に開塾の(海部塾)塾長 海部忠蔵)をはじめ、小規模のものがいくつもあったようである。教授内容は、当時の新聞広告などから英語に関しナショナルリーダー第一・第二及び初歩の英文典を中心とした程度であった。

参考までに明治年間における英語を主とした私立学校の設置状況について、県統計書に表れたものを整理すると次の表の通りである。

### 開塾 廣告

拙者儀今般左ノ處ニ於テ私塾ヲ開キ海部塾ト唱ヘ左ノ學科ヲ教授セントス有志ノ人ハ弊塾規則書一覽ノ上入學アル可シ豫科

普通英学

字音書○第一讀本○文典○地理書○萬國史○理讀○米國史○英國史○佛國史○羅馬史○希臘史○脩身學○動物學○植物學○ウニランド氏經濟書○法律學○化學○人身究理書○近世史○キゾー氏文明史○論理學○ミル氏經濟書○心理學  
本科

農業学

農學初歩 耕圃學○稼穡學○果實學○家禽學○農業器械學○植生如何○肥養論○植養如何○牧牛學○牧羊學○牧馬學○農用化學○農業經濟學○獸醫學○山林學○昆虫學

高知縣阿波國名東郡北山路町  
四十四番地

海部 忠蔵

明治十三年二月廿五日

私塾廣告(明治13年3月2日「普通新聞」より)



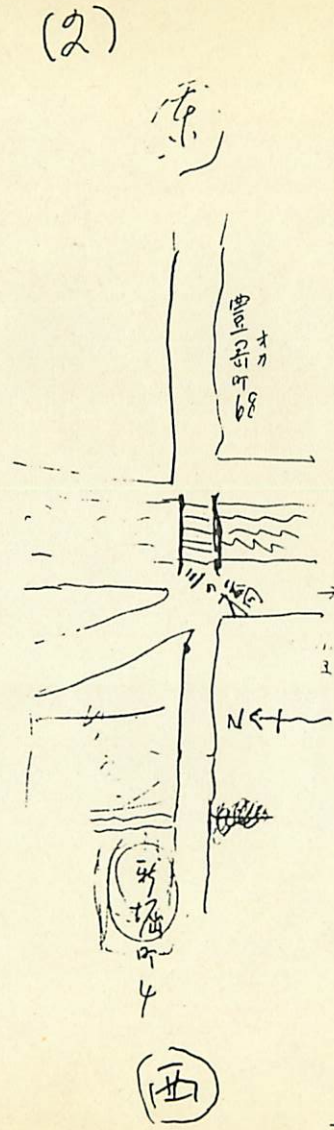
ミシオン坊ちとよ通が あつた

忠花は 大いじと地んで 忠花の母とよと片のあつたしな。

忠花次郎の二人を 芝居三回豊登町68の借家2階にて  
坊末の12才心した。坊中の校長代理はミシオン校長

西一八九〇年(明三十二年)の夏頃

米を汽船千やイナ号で 横浜より横浜へ向ふ  
しな。忠花の二人は 横浜の信子社まで送る  
為め。忠花は34才で 忠花は10才だと記す



(2)

忠花・学んだ学校

Parham College  
Richmond, Indiana province, U.S.A.  
ケニントン男女共学校

右のト正也  
忠花・学んだ科目 土不才

西一八九三年(明三十二年)夏頃

優秀な成績で同校を卒業し  
Bachelor of Science (科学士)

の称号を授けられ豊登町の吾妻(現)にて生れた  
しなと忠花は 横浜にて向ふより同校の校長に  
会交した

(3)  
さしこの後にして あつた後を思い出したら  
忠花せんは

(4) 今 死之略記一七廿九月九 (西一八五二) 年  
 う、棟の記懐と云ふ 百思してゐる所

海軍英一少佐

6823

カシタ

内記録の中 6ページにある

(1) 湯田とよ子の長男忠雄と  
 の十一字は ぬゝて下さい

(2) 忠雄の生れたのは 明治13年 (西一八八〇) だろ？  
 今年 八十八才です

(3) 忠雄と したは 西一八八二年頃 徳島より 東京の  
 神田 駿河台スルガ まで来たのでは

(4) によと 忠雄は 西一八八三年頃 東京の 芝居の 芝居  
 上座した

(一)



(5) 忠義の味 三十二年の 当時の高ゴ商政学校  
(今の商大)に入学した

右の通り所訂の形を 尚ほ プレンド 女学校

(=)

五十才史の 忠義自身の手記が ありまう。あ  
それを所覧の上 今因の所記と たいい <sup>チカ</sup> 所 <sub>ない</sub>  
様を ぶされ 友と おす。めしませう

尚々 孝子の 何ボの 今因の 連絡 致し 友を 林  
中 居ります

先母 在 在 内 親 様 の 思 慕

多分 多分 しんが ぶ あり あり じ 中 中 先

お便り あり あり とう 皆 さん お 渡り ない

様 び 結 核 ころ ち も 一 月 登 び ます

忠 義 お じい さん へ なる 程 大 変 せ ます

秋 一 生 様 原 記 懐 を 中 <sup>ウ</sup> 記 <sup>キ</sup> して

市 報 者 して 見 ます け け け け け け け け け け

君 へ 下 さい、 せ どり 君 念 へ お 引 紙 が

情 人 だ と いう、 ち ちゃん だ ー して け け け

め け 考 へ いて いる、 ち ちゃん け け け け け け け

A Merry Xmas to you, all.  
は ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

編 集 後 記

祖父が逝ってから数年後、敗戦の色日々に濃く、次々と焼土と化す東京を去り、私達一家は長野に疎開した。見知らぬ土地で食料難と斗いつつ、信濃の山河を眺めながら言った父母の言葉を私はまざまざと覚えている。

「親というものは居なくなると寂しいものだな」父。「おじいちゃんを見送ってからこんなひどい世の中になってよかった」母。

祖父と異なり子煩悩の両親に育てられて私達姉弟は幸せだった。

自分も人生の後半にさしかかり、この頃己が道を只すら歩いて去っていった人々が限りなく愛しく思えてならない。そして又、これからの困難な時代を、二十一世紀を生きる若い人達もいとしく思う。それぞれの道の真実を追い求めて真剣に生きていって頂きたいと心から願っております。

資料をお送り下さいました方々に心からお礼申し上げます。

「海部忠蔵」追想録

平成元年二月一日 印刷

平成元年二月一日 発行

発行者 丸井みどり

〒273 千葉県船橋市金杉6-11-8

☎〇四七四(四八)三五六四

印刷所

トミタ孔版

〒105 東京都港区新橋六-二〇-八

☎〇三(四三四)〇七五五